「破壊」に関連した多義和語動詞の意味拡張パターン

―語彙能力の上位・下位群の中国人日本語学習者と日本語母語話者の比較―

張婧禕（宮崎大学）・玉岡賀津雄（湖南大学・名古屋大学）・王蕾（東華大学）

要　旨

『基本動詞ハンドブック』から、「破壊」に関連した「折る」「割る」「砕く」「破る」「潰す」の５つの和語動詞を選んで、日本語母語話者と中国人学習者に、これらの動詞と共起する目的語の産出調査を行った。(1) 産出頻度がハンドブックの基本義と派生義ではどう異なるか、(2) 中国人学習者の基本義と派生義の産出頻度は日本語母語話者とどう違うか、(3) 中国人学習者の日本語能力によって基本義と派生義の産出頻度がどう違うか、を検討した。その結果、基本義の頻度が常に最多になるとは限らなかった。これは、基本行動に基づいて意味が派生するという発想で意味的ネットワークが必ずしも形成されるとは限らないことを示唆している。また、中国人学習者は、日本語の語彙能力の向上と共に目的語の産出が豊富になり、多様な表現を産出することができるようになる。一方、語彙力の低い中国人学習者は、母語の漢字使用の影響を強く受けるようである。

【キーワード】 多義　和語動詞　意味拡張　語彙能力　中国人日本語学習者

1.　はじめに

多くの和語動詞は複数の意味を持つ。これらは多義動詞と呼ばれ、基本義から様々な意味を派生するとされている。たとえば、『基本動詞ハンドブック』に掲載された樹形図（https://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/au/）のように、日本語の和語動詞「合う」の場合、基本義の「①一体化」から「②視覚的な一致」「③サイズの一致」「④基準との一致」「⑧調和」「⑤期間や時間の一致」「⑥思考上の一致」「⑦感情・心理面の一致」という順に、様々な意味を派生させている。こういう意味の広がりは意味拡張と呼ばれる。Fillmore（1975）や松本（2003）は、人間は典型的（prototypical）な基本行動を基にして、コアとなる概念カテゴリーを作ると述べている。籾山（2002）は、多義語の分析において、3つの「認定」ステップを挙げている。まず、どういう多義を持っているかの認定、それらの多義の基になるプロトタイプ的意味（基本義）の認定、そして複数の意味の相互関係の認定である。この認定のステップを基準に、国立国語研究所（Prashantほか 2012、2013）は、和語動詞179語の基本義（ハンドブックでは「中心義」と呼んでいる）と派生義を樹形図に描いて、

『基本動詞ハンドブック』をWeb（https://verbhandbook.ninjal.ac.jp）上で検索ができるようにした。これは動詞が表す基本動作を基本義として、そこから多様な意味が派生させるという考えに基づいている。一方、和語動詞の基本義とそこから拡張した派生義は、個々の心的辞書（メンタルレキシコン）の意味的ネットワークを構成する。意味的ネットワークとは、人間の脳内に貯蔵された記憶の一種であり、認知主体が持つ意味的関連性を持った語彙記憶の総体である（玉岡 2013、2022）。しかし、心的辞書の記憶は、日本語母語話者であろうと日本語学習者であろうと、個々人の社会的背景、時代背景、経験、興味などの諸要因によって、和語動詞の基本義と派生義の意味使用が異なっており、それが個々人の構築する和語動詞の意味的ネットワークの構造に影響すると予想される。そう考えると、意味的ネットワークは、固定されたものではなく、もっと柔軟な構造を持っているのではないかと思われる。とりわけ外国人日本語学習者の場合は、日本語母語話者と異なる意味拡張を起こす可能性があることも指摘されている（大神 2017、松田 2000）。たとえば、中国人日本語学習者が和語動詞を学ぶ場合、漢字を共有しているので、その漢字を基にした中国語での意味的ネットワークが、日本語の和語動詞の習得にも影響すると考えられる。そこで本研究では、基本動作を基本義とし、そこから多様な意味が派生するという発想の意味拡張パターンを構築することに、どれだけの普遍性があるかを検討することにした。

本研究の調査対象として「破壊」を表す意味を取り上げて、『基本動詞ハンドブック』のサイト（https://verbhandbook.ninjal.ac.jp/）から、「破壊」に関連した「折る」「割る」「砕く」「破る」「潰す」の5つの和語動詞を選んだ。これらの動詞と共起する目的語の産出調査を、日本語語彙能力テストと併せて中国人日本語学習者（以下、学習者）に行った。さらに、日本語母語話者を基準にして、学習者による多義動詞の目的語産出における意味拡張パターンを考察した。なお、破壊を表す動詞「壊れる」の多義性について多数の先行研究（福田 2006）に詳しく記述されており、その意味獲得に関する研究（小森ほか 2012、綱井 2013など）もすでに行われているので、本研究では動詞「壊す」と「壊れる」を研究対象としない。具体的には、(1) 和語動詞の目的語の産出頻度が、ハンドブックの基本義および派生義でどう異なるか、(2) 中国人日本語学習者の基本義および派生義の産出頻度が、日本語母語話者と比べてどのくらい異なるか、(3) 中国人日本語学習者の日本語能力によって基本義および派生義の産出頻度がどのように異なるか、の3つの視点から考察した。

2. 調査手順

2.1 調査協力者

学習者83名（*M*=21歳0ヵ月；*SD*=1歳7ヵ月）を対象に、語彙テスト（宮岡・玉岡・酒井 2011、張・王・玉岡 2021）と5つの多義動詞の目的語産出調査を行った。

彼らは中国の大学で日本語を専門として学んでおり、平均学習歴が2年8ヵ月であり、標準偏差が1年6ヵ月であった。また、日本語母語話者44名（*M*=18歳9ヵ月；*SD*=10ヵ月）に同様の目的語産出調査を行った。

2.2　調査内容

2.2.1　多義動詞の目的語産出調査の実施手順

学習者と日本語母語者に対して、紙媒体による多義動詞の目的語産出調査を行った。それぞれの動詞に対して、「動詞＋目的語」という構造を取れる目的語を学習者と母語話者に1分以内で書いてもらった。

2.2.2　日本語語彙能力テスト

本研究では、幅広い語彙知識を測るため、宮岡ほか（2011）および張ほか（2021）の2種類の日本語語彙能力テストを併せて使用した。このテストは、形容詞、動詞、名詞、機能語、オノマトペの5種類から構成されているので、学習者による語彙知識を総合的に測定できる。それぞれの種類に12問を設けるので、合計60問である。また、各問1点で60点満点となる。問題は、四者択一の形式で提示される。たとえば、「彼女はどんなに大変なときでも、（　　）ひとつ言わずに病人の世話をしている。」という文の括弧内に入れるのに最適な語を、「文句」「苦難」「不評」「愚痴」の4つの中から1つ選ぶという形式である。ここでは「愚痴」が最もふさわしい答えである。

3.　記述統計の結果と語彙能力による群分け

60問を持つ日本語語彙能力テスト（以下、語彙テスト）の平均得点は38.05点であり、標準偏差は7.94点であった。測定した語彙テストにおける各下位分類の結果は、表1の通りである。なお、クロンバックの信頼度係数は0.85で、このテストが内的一貫性のあるテストであることが示された。その後、83名の学習者に対して、語彙テストの得点を使って群分けを行った。平均得点に基づいて、上位群は38点以上の学習者（*N*=42）とし、下位群は37点以下の学習者（*N*=41）とした。

表1　日本語語彙能力テストの記述統計と信頼度係数

下位分類	満点	*M*	*SD*	Max	Min	信頼度係数（α）
語彙能力テスト	60	38.05	7.94	54	22	0.85
名詞	12	9.52	1.63	12	5	
動詞	12	8.59	1.86	12	5	
形容詞	12	7.47	2.13	11	3	
機能語	12	6.55	2.16	11	1	
オノマトペ	12	5.92	2.09	11	2	

注：*N*＝83.

4.　分散分析による３群間の目的語産出量の比較

学習者の日本語の語彙知識が産出量に影響することが想定されるので、語彙テストを基に学習者を上位群と下位群に分けた。さらに、日本語母語話者を基準として、3群間で産出量を比較し、各群の意味的ネットワークの異なり方を考察する。そのために、上位群学習者（M=12.07, SD=5.19）、下位群学習者（M=8.15, SD=4.08）、母語話者（M=26.80, SD=6.15）の３群による５つの多義動詞の総目的語産出量を一元配置の分散分析で検証した。その結果は表２に示した。

全体の産出頻度について、３群の主効果が有意であった〔$F(2, 124)=151.64$, $p<.001$, $\eta_p^2=.71$〕。シェフェの多重比較で３群による産出量を比較した結果、目的語産出量の総数は「下位群学習者＜上位群学習者＜母語話者」という順に多くなった。つまり、語彙力が高ければ高いほど、和語動詞の目的語の産出量が多くなることを示した。同様の統計的手法を使って、それぞれの多義動詞（「折る」「割る」「砕く」「破る」「潰す」）の目的語産出量を３群の一元配置の分散分析で比較した。これらの結果は、表２にまとめた。すべての和語動詞について、群の主効果が有意であった（「折る」:〔$F(2, 124)=53.96$, $p<.001$, $\eta_p^2=.47$〕;「割る」:〔$F(2, 124)=102.89$, $p<.001$, $\eta_p^2=.62$〕;「砕く」:〔$F(2, 124)=53.51$, $p<.001$, $\eta_p^2=.46$〕;「破る」:〔$F(2, 124)=46.59$, $p<.001$, $\eta_p^2=.43$〕;「潰す」:〔$F(2, 124)=64.10$, $p<.001$, $\eta_p^2=.51$〕)。シェフェの多重比較を使って３群による産出量を詳細に検討した。その結果、「潰す」についてのみ目的語産出量が、「下位群学習者＜上位群学習者＜母語話者」の順に多かった。しかし、その他の４つの多義動詞の目的語産出量は、「下位群学習者＝上位群学習者＜母語話者」の順になった。全体でみると語彙知識が目的語の産出力に強く影響しているものの、和語動詞の種類によって、違いがあることも分かった。

表２　３群による目的語産出量を分散分析で比較した結果

和語動詞	(1)下位群 (N＝41)		(2)上位群 (N＝42)		(3)母語話者 (N＝44)		一元配置の分散分析	効果量	シェフェの多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD			
折る	2.63	1.41	3.24	1.51	6.14	2.01	$F(2, 124)=53.96$, $p<.001$	$\eta_p^2=.47$	(1) = (2) < (3)
割る	1.17	1.28	1.98	1.80	5.66	1.51	$F(2, 124)=102.89$, $p<.001$	$\eta_p^2=.62$	(1) = (2) < (3)
砕く	1.39	0.97	1.95	1.56	4.64	1.94	$F(2, 124)=53.51$, $p<.001$	$\eta_p^2=.46$	(1) = (2) < (3)
破る	1.88	1.69	2.76	1.57	5.30	1.82	$F(2, 124)=46.59$, $p<.001$	$\eta_p^2=.43$	(1) = (2) < (3)
潰す	1.07	1.46	2.14	1.60	5.07	1.96	$F(2, 124)=64.10$, $p<.001$	$\eta_p^2=.51$	(1) < (2) < (3)
合計	8.15	4.08	12.07	5.19	26.80	6.15	$F(2, 124)=151.64$, $p<.001$	$\eta_p^2=.71$	(1) < (2) < (3)

5.　５つの多義動詞と共起する目的語産出量の考察

協力者（学習者、母語話者）による多義動詞の目的語産出を『基本動詞ハンドブッ

ク』を基に分類した。まずは、それぞれの多義動詞における各意味カテゴリーの産出量を、χ^2 検定を用いて複数の意味を3群間で検討した結果を表3に示した。すべての多義動詞における群の主効果が有意であった。なお、母語話者の産出頻度が『基本動詞ハンドブック』の基本義と派生義とどう異なるか、また、学習者は母語話者とどう異なるかを明らかにするため、『基本動詞ハンドブック』に掲載された意味カテゴリーと樹形図に従って、各動詞の意味的カテゴリーにおける3群による産出量を詳細に考察する。

表3　χ^2 検定で目的語の意味カテゴリーごとの産出量を比較した結果

動詞	グループ内の頻度			χ^2 値
	下位群 (N＝41)	上位群 (N＝42)	母語話者 (N＝44)	
砕く	57	88	204	$\chi^2(6)=30.11, p<001.$
折る	108	136	270	$\chi^2(10)=34.60, p<001.$
潰す	44	89	223	$\chi^2(20)=75.72, p<001.$
破る	77	116	233	$\chi^2(18)=82.50, p<001.$
割る	48	83	249	$\chi^2(20)=60.71, p<001.$

5.1　「折る」

「折る」の樹形図および各意味カテゴリーにおける産出量と産出率は図1に報告した。「折る」の基本義は「①物の屈折」であり、「棒状・線状の物、板状の物を角度を付けて曲げる」行為を指す（https://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/oru/）。その他の意味はすべて派生義とされている。基本義の産出量は、3群をあわせても20回であった（母語話者：8.33％、上位群学習者：3.68％、下位群学習者：2.22％）。つまり、基本義の「①物の屈折」が最もよく産出される意味ではないことがわかる。

派生義の「②分断」「③曲げて畳む」では、3群に有意な違いがみられた。そのなかで、「②分断」は母語話者による産出率が41.11％であり、母語話者では最頻義であった。それに対して、学習者は、「②分断」と「③曲げて畳む」は、上位群による産出率は同じ割合（33.82％）であり、違いはなかった。しかし、下位群では、「③曲げて畳む」の産出率は49.07％もあり、3群で最も多かった。学習者による産出には、「ペーパーを折る」「紙を折る」「手紙を折る」「折り紙を折る」「布団を折る」などのような、紙や布と関するものの産出が圧倒的に多かった。それは、学習者の母語である中国語の“折纸（紙を折る）”の“折”で頻繁に産出されるので、③の派生義の産出を促進したのではないかと考えられる。つまり、母語の使用が影響したのではないかと思われる。

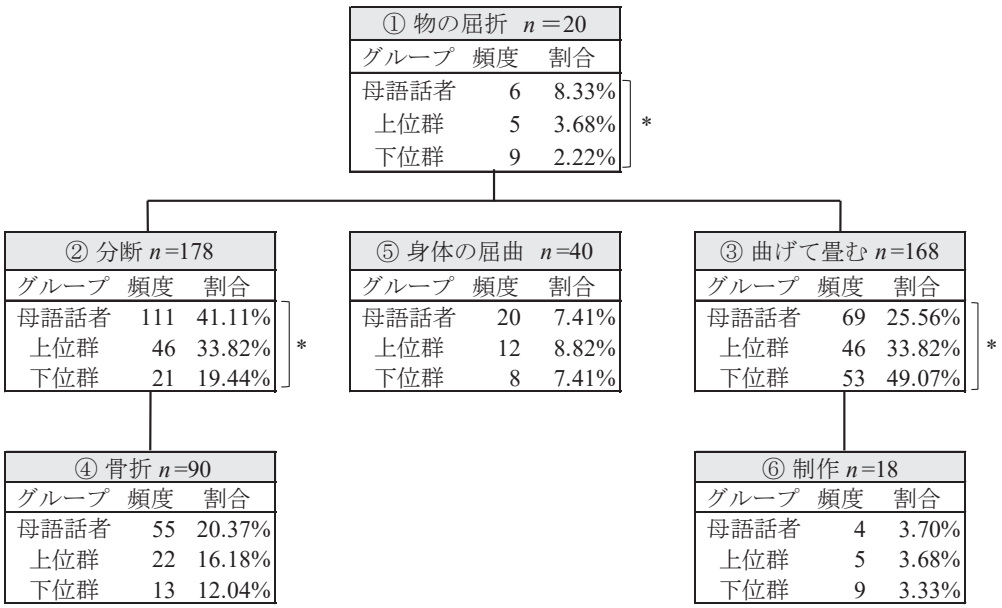

図１　「折る」の意味カテゴリーにおける産出量と産出率
注：*は、誤差分析において有意な差があることを示す。

5.2　「割る」

「割る」の樹形図および各意味カテゴリーにおける産出率は図２に報告した。基本義は「①分割」（https://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/waru/）で、「固いものに力を加えて、複数に分ける」行為である。「折る」と同様に、３群ともに「割る」の基本義の産出率は低く（母語話者：15.66％；上位群：9.64％；下位群：8.33％）、「①分割」の基本義が最頻ではないことがわかる。派生義の「②破壊」「⑤薄める」「⑦振り分け」「⑨基準」「⑩境界線」「⑪ケガ」については、３グループに有意な違いがみられた。「②破壊」は３群あわせて234回の産出があり、３群ともに産出率（母語話者：61.27％；上位群：76.14％；下位群：73.68％）が圧倒的に高かった。しかし、その他の派生義については、学習者による産出率は極めて低く、「⑤薄める」「⑦振り分け」「⑨基準」「⑪ケガ」の産出はなかった。以上のように、『基本動詞ハンドブック』に掲載されている中心となる「折る」と「割る」の「基本義」が最頻でなかったことが分かった。

5.3　「砕く」

「砕く」の樹形図および意味カテゴリーにおける産出率は図３に報告した。基本義は「①物理的粉砕」であり、力を加えて塊を粉々の状態にする行為を指す（https://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/kudaku/）。その他の意味はすべて派生義とされている。「折る」「割る」と異なって、３群ともに「砕く」の基本義の産出率は高かった

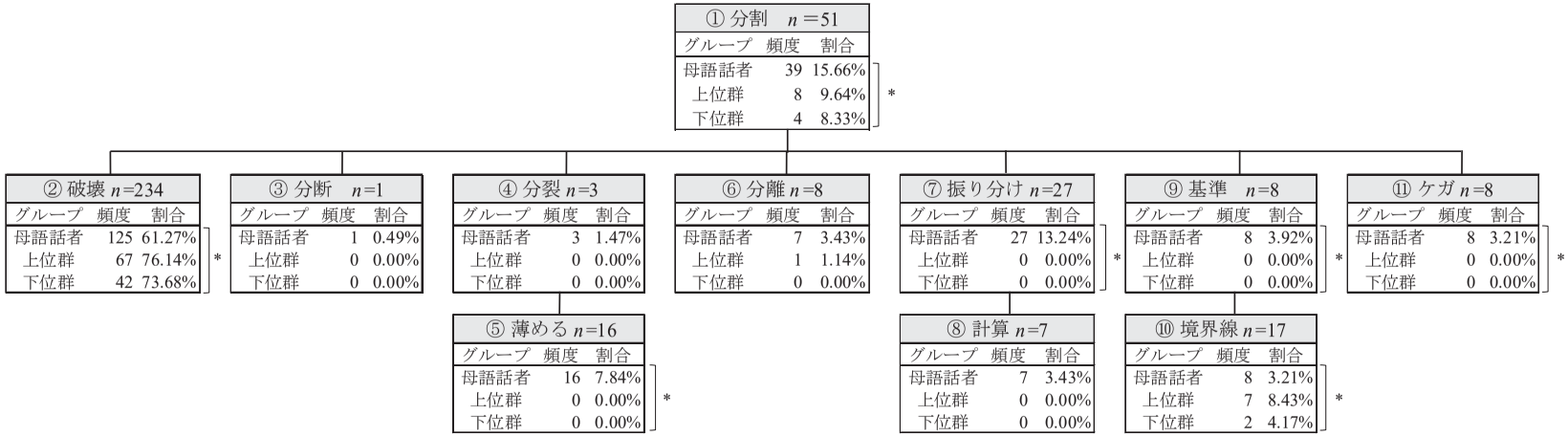

図２ 「割る」の意味カテゴリーにおける使用頻度

注：*は、誤差分析において有意な差があることを示す。

ため（母語話者：88.73％；上位群：67.05％；下位群：71.93％）、「①物理的粉砕」は基本義として最もよく産出されることが示された。一方、母語話者による派生義の産出率は極めて低かった。「⑤平易化」の産出率ではわずか0.98％であり、「③相手の基盤の粉砕」、「④打ち負かす」、「⑥挺身」の産出率では0％であった。母語話者のみならず学習者にとっても、「砕く」の派生義の産出率は全体的に非常に低かった。

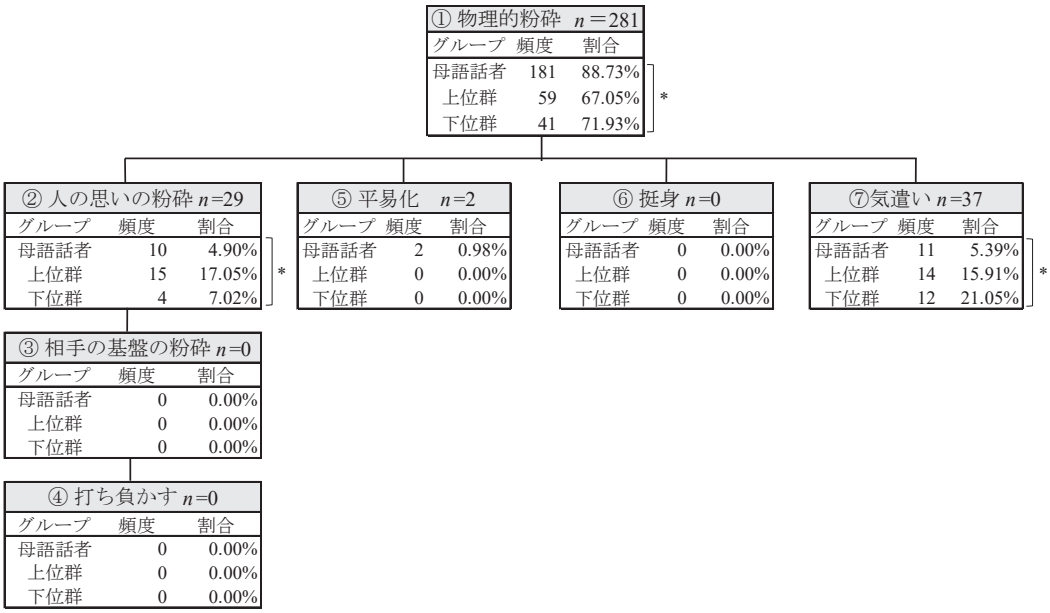

図３　「砕く」の意味カテゴリーにおける産出量と産出率
注：*は、誤差分析において有意な差があることを示す。

一方、派生義の「②人の思いの粉砕」と「⑦気遣い」では、3群に有意な違いがみられた。3群あわせて、「②人の思いの粉砕」では29回の産出があり、「⑦気遣い」では37回の産出があった。3群における産出率を詳細にみてみると、「②人の思いの粉砕」では、母語話者と比べて、学習者のほうが有意に多く産出した（母語話者：4.90％；上位群：17.05％；下位群：7.02％）。学習者の産出をみると、「夢を砕く」「闘志を砕く」などのような産出が圧倒的に多かった。ここからは推測であるが、日本語の漢字「砕」は中国語の“碎”に相当する。中国語では、“粉碎梦想（夢を砕く）”“粉碎斗志（闘志を砕く）”などのような表現があり、日本語の派生義の「②人の思いの粉砕」の意味使用と類似している。そのため、「⑦気遣い」でも同じで、特に下位群の学習者で、「心を砕く」のような表現が頻繁に産出された（母語話者：5.39％；上位群：15.91％；下位群：21.05％）。

5.4 「破る」

「破る」の樹形図および各意味カテゴリーにおける産出率は図4に報告しているように、基本義は「①分割」としており、薄い平面状のものに力を加えて裂いたり穴を開けたりする行為を指す（https://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/yaburu/）。その他の意味は全部派生義とされ、派生義の「②境界」「③通過」「⑤更新」「⑥規範」「⑧安定」「⑩関係」では、3群に有意な違いがみられた。しかし、3群あわせて「①分割」を145回産出し、産出率が3群ともに最も高かった（母語話者：42.49％；上位群：22.41％；下位群：25.97％）。したがって、「①分割」は基本義として最も多く産出されることがわかる。3群に有意な違いがみられたその他の派生義のうち、「③通過」では、上位群の産出率が3群において最も高かった（母語話者：0.00％；上位群：8.62％；下位群：2.60％）。学習者による産出をみてみると、上位群は「ドア」「門」「扉」などバリエーションが多く産出した。それに対して、下位群は「バリア」のみ産出した。「③通過」の意味使用の状況とは逆に、「⑤更新」（母語話者：2.58％；上位群：0.00％；下位群：5.19％）「⑥規範」（母語話者：2.58％；上位群：0.00％；下位群：5.19％）「⑧安定」（母語話者：1.29％；上位群：10.34％；下位群：15.58％）「⑩関係」（母語話者：0.00％；上位群：0.00％；下位群：1.30％）では、下位群の産出率が3群において最も高かった。下位群では、「⑤更新」を表す「記録を破る」、「⑥規範」を表す「マナーを破る」、「⑧安定」を表す「平和・夢・理想を破る」、「⑩関係」を表す「同盟を破る」を多く産出し、バリエーションが少なかった。ひとまとまりの表現として勉強したのではないかと考えられる。

5.5 「潰す」

「潰す」の樹形図および各意味カテゴリーにおける産出率は図5に報告した。基本義は「①変形」で、人や動物やものが立体的なものに力を加えて、平らな形に変える行為を指す（https://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/tsubusu/）。その他の意味はすべて派生義とされている。3群あわせて「①変形」を120回産出し、産出率が最も高かった。そのため、「①変形」は基本義として最も頻繁に産出されることがわかる。一方、派生義の「④屠殺」「⑤破壊」「⑥機能不全」「⑦組織」では、3群に有意な違いがみられた。3群における産出率をみると、母語話者にとって、「①変形」の産出率が最も高かった（母語話者：43.05％；上位群：16.85％；下位群：20.45％）。しかし、上位群の学習者では、産出率が最も高かったのは「⑥機能不全」であった（母語話者：10.31％；上位群：33.71％；下位群：18.18％）。上位群による産出は「相手・敵・ライバルを潰す」などのような「競争相手」系に集中している。上位群の学習者と違って、下位群の学習者は3群において「⑤破壊」の産出率が最も高かった（母語話者：11.66％；上位群：16.85％；下位群：27.27％）。「⑦組織」では、下位群の

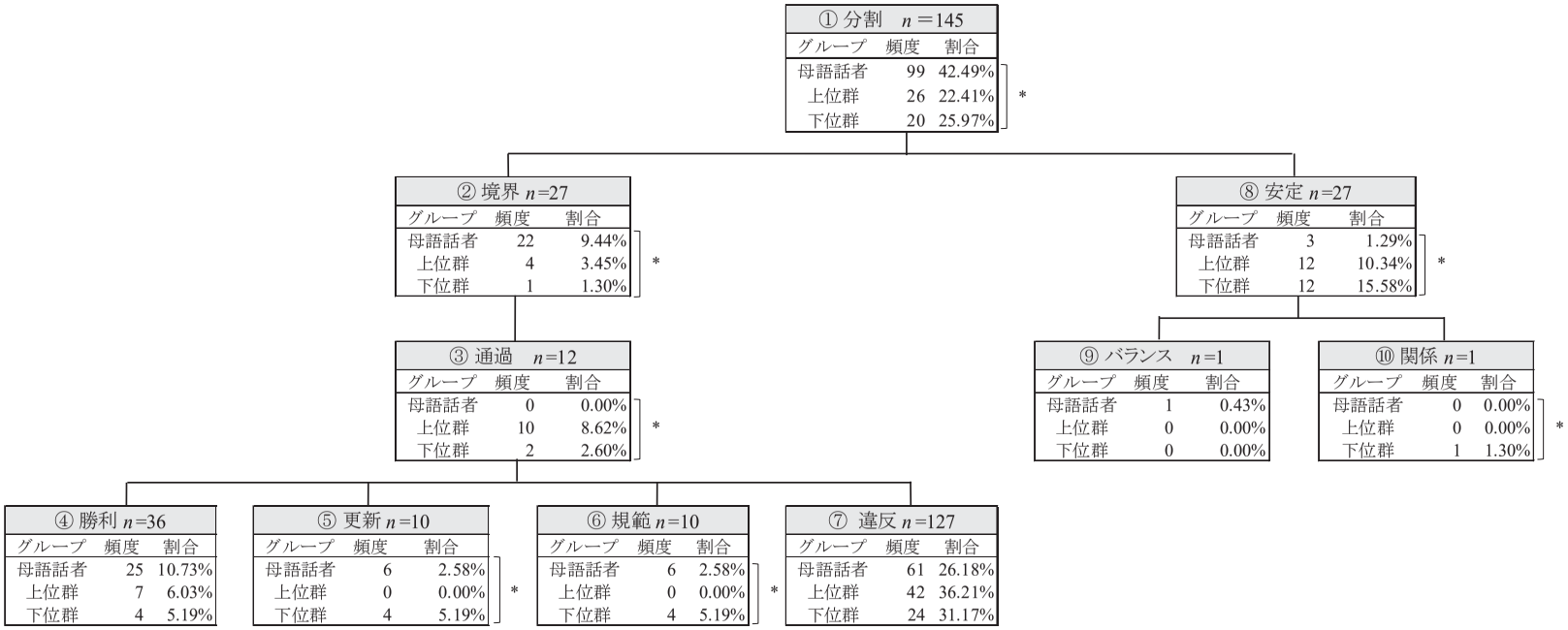

図４ 「破る」の意味カテゴリーにおける使用頻度

注：*は、誤差分析において有意な差があることを示す。

産出率が3群において最も高かった（母語話者：2.24％；上位群：14.61％；下位群：15.91％）。下位群では、多くの産出は「軍隊・敵軍・軍」などのような「軍」と関連する名詞であった。それは中国語において「打ち負かす」という意味を表す“溃”と形態的に類似している。そのため、下位群の学習者は“击溃敌军”などの中国語の表現による影響を受けて、日本語学習に転移して「軍や敵を潰す」を産出したのではないかと思われる。上位群の学習者も「軍」を産出したが、上位群と比べて下位群のほうがより顕著であり、非常に特徴的である。

6. 総合考察

本研究では、中国人日本語学習者（*N*=83）と日本語母語話者（*N*=44）による5つの多義和語動詞と共起する目的語の産出調査を実施して、産出量と産出内容の比較および学習者内で語彙知識の影響を検討した。まず、「破る」「砕く」「潰す」の3つの和語動詞は『基本動詞ハンドブック』の樹形図に即した産出量であった。これらの和語動詞は、基本動作に基づいた基本義が頻繁に産出されており、『基本動詞ハンドブック』の意味拡張パターンを反映しているといえよう。しかし、「折る」と「割る」の2つの和語動詞は、『基本動詞ハンドブック』の基本義と派生義の樹形図に即さない産出量であった。本研究の産出量は、個人の心的辞書での意味的ネットワークの結果を反映したものであると考えられる。これが日本語母語話者でも中国人日本語学習者でも『基本動詞ハンドブック』の主張と異なっていたことを考慮すると、やはり基本動作とは違った要因がこれら2つの和語動詞の意味拡張パターンに影響しているのであろう。

したがって、『基本動詞ハンドブック』で示された基本動作だけでは、すべての和語動詞の意味拡張パターンを説明することはできないといえよう。さらに、下位群の学習者は上位群よりも産出頻度が少なかった。これは日本語の語彙力を反映していると思われる。また、下位群の学習者は、母語の中国語の表現をそのまま日本語で使用する傾向もみられた。本研究の結果は、以下のように総括できよう。

6.1 日本語母語話者による産出頻度の基本義と派生義の頻度

国立国語研究所（Prashantほか 2012、2013）は、和語動詞179語の基本義と派生義を『基本動詞ハンドブック』に掲載した。これを基に、本研究では、日本語母語話者による5つの和語動詞の目的語の産出を検討した。基本義は、動詞が示す基本的な動きを基にして定義されている。「砕く」「破る」「潰す」の3つの和語動詞については、基本義の産出量が最も多かった。産出例をみてみると、「石を砕く」「紙を破る」「缶・トマト・卵を潰す」など、日常生活の場面で動作と直結した表現が産出されることが多く、『基本動詞ハンドブック』で主張されている基本動作を基にした基本義から派生義へと広がる意味拡張のパターンが反映されているようである。

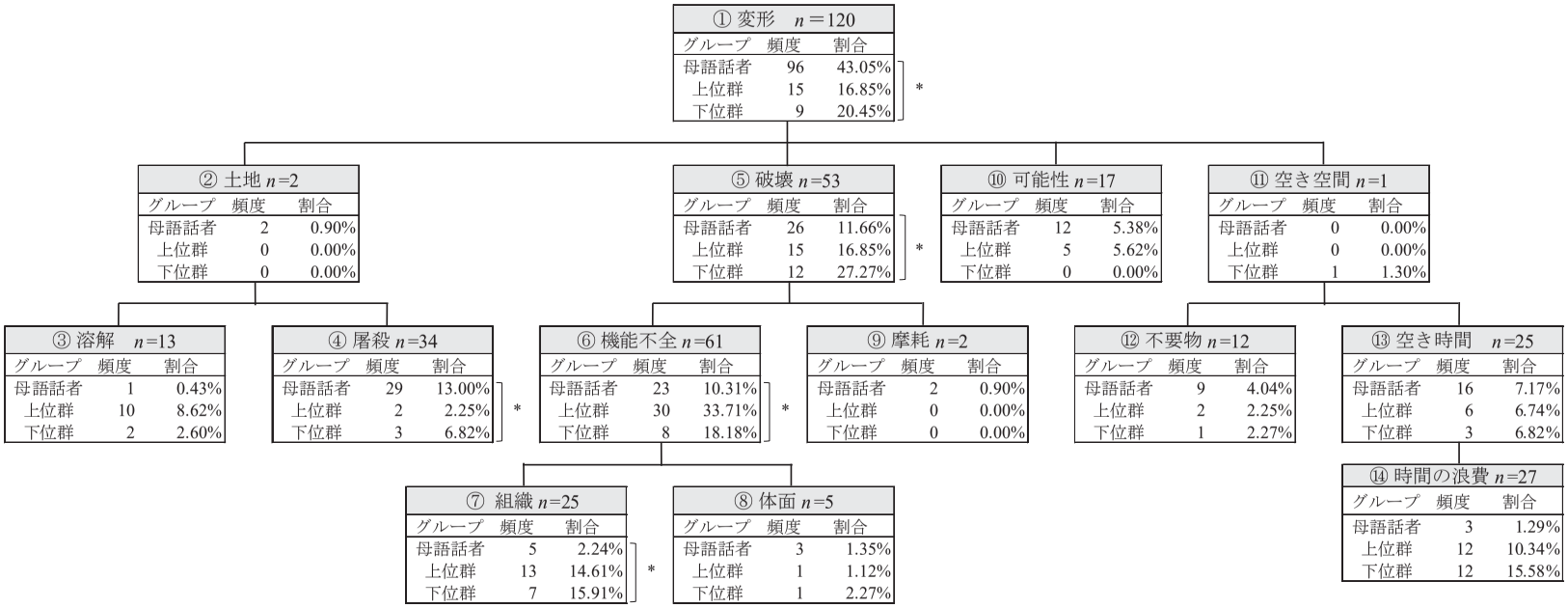

図５ 「潰す」の意味カテゴリーにおける使用頻度

注：*は、誤差分析において有意な差があることを示す。

一方、「折る」の基本義は「棒状・線状の物、板状の物を角度を付けて曲げる」行為としている。同様に、「割る」の基本義は、「固いものに力を加えて、複数に分ける」である。こうしたハンドブックの基本義は、基本的な動作を基に定義されている。ところが実際には、「折る」はものを分断することや曲げて畳むという派生義、「割る」は破壊することや振り分けることの派生義のほうがはるかに産出量が多かった。このような日本語母語話者による産出の違いは、社会文化的な背景などによって生じる個々人の日常生活における使用量を強く反映して、基本義の産出が多くならなかったのではないかと思われる。『基本動詞ハンドブック』に紹介された和語動詞の基本義から派生義への意味拡張が必ずしも産出量を反映していないことがわかる。産出量は、個々人の意味的ネットワークにおいてどの意味がとくに顕著であるかを示しており、本当に基本義が中軸的な意味を持っているのであれば、基本義の産出量が多くなると予想される。したがって、本研究は、鷲見（2015）が指摘したように、認知言語学で展開されてきた理論的なプロトタイプと個人が持つ心理的なプロトタイプが必ずしも一致しないことを示しているといえよう。鷲見（2015）のいう心理的なプロトタイプを個人の意味的ネットワークであると考えれば、多様な人々が共有する意味的ネットワークが存在すると想定され、それは必ずしも基本動作から派生するとは限らないようである。つまり、個々人の心的辞書に作られる意味的ネットワークは、認知言語学の理論で議論されるほど規則的な派生から成り立つような構造を持っていないと考えるべきであろう。

6.2　中国人日本語学習者の基本義および派生義の産出頻度

中国人日本語学習者は、5つの動詞のうち「砕く」だけが、日本語母語話者と同じ基本義を多く産出した。「砕く」の基本義は、塊に力を加えて粉々の状態にすることである。「砕く」の派生義は、人の思いを打ち壊すこと、表現を分かり易く説明すること、あれこれと気を遣うことなどであり、基本義と比べて派生義は意味的に大きな飛躍がみられるので、日常生活においてもあまり使われず、日本語母語話者と同様に、日本語学習者も産出するのが難しかったようである。「割る」「破る」「折る」は、産出量の多い意味が上位群と下位群の学習者で類似していた。それに対して、「潰す」の産出では、上位群は下位群と異なっていた。こうした日本語母語話者との産出の違いおよび日本語能力による産出の違いは、和語動詞で使われている漢字と中国語の漢字との類似性と日本語学習で使われる教材の影響が大きいのではないかと思われる。

和語は日本語の固有語であるが、中国語の漢字と比べると同形語も少なくない。そのため、意味的な推測が容易である（小森 2013）。両言語において字形と意味が類似している「割」と“割”、「折」と“折”、「砕」と“碎”、「潰」と“溃”、「破」と“破”のような和語動詞では、両言語の意味的ネットワークが共有され易いと思われ

る（玉岡 2022）。たとえば、「砕く」であれば、中国語で対応する漢字は“碎”である。日本語とは多少異なるものの、容易に両方の漢字を関連付けることができる。そのため、“粉碎梦想（夢を砕く）”など、日本語と同じ共起表現が浮かぶ。同様に、「潰」“溃”と「破」“破”のような日中で対応のある漢字で、“击溃敌军（敵軍を潰す）”、“打破记录（記録を破る）”などのような類似した共起表現が挙げられる。このように、たとえ異なる言語で使用されている漢字であっても、概念的には両言語で共通の意味が思い浮かぶので、日本語の和語動詞であっても中国語の意味的影響を強く受けると思われる。

小森ほか（2012）は、和語動詞の習得にも中国語の知識が影響し、とりわけ日本語習熟度の低い段階から、中国語の知識の影響が強いと報告している。本研究の産出調査の結果では、小森ほか（2012）と同様の結果がみられ、特に日本語の語彙知識が低い場合には、心的辞書内の日本語の語彙の意味的なネットワークが不十分であるため、中国語の表現をそのまま日本語で使用する傾向が顕著にみられたのでないかと思われる。一方、鷲見（2015）では、和語動詞が多義であるという特徴から、和語動詞の習得が十分に進まない可能性を指摘している。しかし、本研究の結果では、上位群の学習者と下位群の学習者の意味拡張パターンは必ずしも同じではなかった。中国人日本語学習者は、日本語の語彙能力の向上と共に、和語動詞の目的語の産出も豊富になった。つまり、外国語としての日本語の学習と共に、語彙知識を蓄積し、意味的なネットワークが拡大したと思われる。和語動詞と共起する目的語との関係においても、多様な共起表現を学習して、多くの目的語を産出できるようになったと考えられる。

さらに、日本語教育では、多義の基本和語動詞は初級レベルの語彙として導入される。これらの動詞は複数の意味を持つが、どの意味から学習すべきかについての指針はない。実際、中国で使用される教科書や教授法などにおいては、必ずしも基本義から意味拡張させながら教えるという手順にしたがっているわけではない。教科書や教師による「一部の語義の場当たり的な導入」にとどまっている可能性が高い（鷲見 2015）。そのため、中国人日本語学習者については、同じ漢字が中国語に存在する場合、中国語での使用特徴を教員が認識したうえで、和語動詞を教える工夫が必要であろう。和語動詞を教えるにあたり、基本義からの派生の範囲を柔軟に考えて、教材をどう配置して提供すべきかを考える必要があろう。また、多様な意味を持つ和語動詞を、どのように配置して指導すると効率的に習得できるかを検討する必要もあろう。

参考文献

大神智春（2017）「多義動詞を中心語とするコロケーションの習得」『日本語教育』166、47-61

国広哲弥（2006）『日本語の多義動詞 理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店

小森和子・三國純子・徐一平・近藤安月子（2012）「中国語を第一言語とする日本語学習者の漢語連語と和語連語の習得―中国語と同じ共起語を用いる場合と用いない場合の比較―」『小出記念日本語教育研究会論文集』20、49-61

小森和子（2013）「漢語と和語の違いに関する中国人日本語教員の認識」『明治大学国際日本学研究』5（1）、19-38

鷲見幸美（2015）「中国語を母語とする日本語学習者による多義動詞の使用―KYコーパスに見られる使用語義の広がり―」『言語文化論集』36（2）、81-96

玉岡賀津雄（2013）「メンタルレキシコンと語彙処理―レフェルトのWEAVER++モデル―」『レキシコンフォーラム』6、327-345

玉岡賀津雄（2022）「日本語学習者の記憶のメカニズムと心的辞書の構造」『第二言語としての日本語の習得研究』25、57-83

張婧禕・王蕾・玉岡賀津雄（2021）「中国人日本語学習者による動作の一時性および重複性を示すオノマトペの理解」『ことばの科学』35、87-102

綱井勇吾（2013）『外国語学習者による語の意味の獲得に関する研究―英語の「壊す／切る」系動詞を例として―』慶應義塾大学院政策・メディア研究科2013年度博士論文（未公開）

福田あやの（2006）「破壊を表す動詞『壊れる』の多義性について」『思言 東京外国語大学記述言語学論集』1、140-149

プラシャント・パルデシ（編）（2013）「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」『国立国語研究所共同研究報告12-07・共同研究プロジェクト報告書』、1-200

松田文子（2000）「日本語学習者による語彙習得―差異化・一般化・典型化の観点から―」『世界の日本語教育』10、73-89

松本曜（編）（2003）『認知意味論（シリーズ認知言語学入門）』大修館書店

宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘（2011）「日本語語彙テストの開発と信頼性：中国語を母語とする日本語学習者のデータによるテスト評価」『広島経済大学研究論集』34（1）、1-18

籾山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』研究社

Fillmore, C. J. (1975). An alternative to checklist theories of meaning. *Proceedings of the First Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*,123-131.

Prashant, P., Imai, S., Kiryu, K., Lee S., Akasegawa, S., & Imamura, Y. (2012). Compilation of Japanese Basic Verb Usage Handbook for JFL Learners: A Project Report. *Acta Linguistica Asiatica*, *2*(2), 37-64.

資料

『基本動詞ハンドブック』〈https://verbhandbook.ninjal.ac.jp〉（2022年10月26日）「合う」「折る」「割る」「砕く」「破る」「潰す」を検索して、引用した。